

会見

平 一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『“神”との会見。』

『Lucifer（ルシファー）』口語版シリーズの一編です。

会見

目

次

会見

地球通信社の報道記者ジャーナリストとして、

私はサタンに取材会見をすることになつてていた。

しかし彼女の姿は、いつものように可憐で愛らしい、

猫と人間の合の子のあいような映像体アバターではなかつた。

サタンといつても悪魔ではなく、異星種族の名称だ。

彼女達は銀河系を統一した“先帝”種族のため、

“先帝”を神に見立て、自らは悪魔を演じるなどして、

かつての人類を含む発展途上種族の文明発展を助けた。

銀河帝国の先進種族は量子頭脳マイクロ・ディングへの人格転移を達成し、

高度な情報処理能力と種族人格の形成能力を得たので、

国際機関の理事国のように、帝国の役職も務められる。

サタンは当時、文明開発長官の地位にあつた。

ところが、軍事国家の“旧帝国”では、

銀河統一後も側近種族の腐敗と抗争が止まらず、ついに内戦が起きて帝国は崩壊、

それに巻き込まれた“先帝”も滅亡してしまった。そこで新興の技術・産業種族や良識的な軍事種族、

銀河系外周の非酸素・非炭素系種族は、
穩健な文官種族のサタンを擁して

“新帝国”を設立し、平和を取り戻したのだ。

私は、その一人に当時の状況を取材するため、
星間通信網ステラネットの仮想空間に入場ダイブした。

しかし、現れたのは黒衣を纏まどい、
鋭い角と妖しく輝く瞳をもつ、
文字通り悪魔のような姿をした、
だが美しい少女だつた。

身元確認は厳しいはずだが、これは何かの冗談か？

今の皇帝種族にも、ヤバい変人がいるのか？

私はあまり期待を持たないようにながら、
挨拶^{あいさつ}もそこそこに話題を切り出した。

『ああ……皆さんは国家の運営に役立つ、

文明発展についての理論にお詳しいようですが、
貴方^ご自身のお考えなどがあつたら、

お聞かせいただけたらと思いまして』

『まあ、これは反省なんだけど……、

文明は、技術なくして発展なし。

でも、それだけじや続かない。

技術の恵みを上手に分ける政策や、

その政策を支える民度、民度を活かせる組織が

ないと、いともあつけなく滅びるわ』

歯に衣着せぬ物^{きぬものい}言いに、私は再び驚いた。

『おお……これはまたどうも、直接的な表現ですね。

普段のサタンの皆さんの考え方や仰りようとは、

何だか異なるようですが……』

『いいえ、公式見解と中味は違わないはずよ。
喋り方が優しいサタンらしくない？』

最初に言わなくてご免なさい……実は私、亡命者なの』
そう言って、彼女は私の眼をまつすぐ見た。

よく考えてみると、表現こそ荒っぽいが、

新帝国の政策方針はまさにその通りだ。

第一に、富の生産・安全に役立つ技術の、

健全な開発・利用を助ける技術的政策。

第二に、富を配分・投資する経済・社会活動を、

最適化する経済・社会政策。

第三に、共に政策を実現する人々の向上・支援のため、

健康や教育を高める人的資源政策。

そして第四に、人々の活用・参画^{さんかく}のため、全種族の
協調や民主化を促す行政管理政策とされている。

すると彼女がにやりと笑い、両目を大きく見開くと、

瞳の奥がぎらりと一瞬、眩い金色に輝いた。

私は驚きのあまり、思わず身体をこわばらせた。

こ、これは……まさかこいつは……。

『……そう、かつて全銀河系を統一し、

サタンに貴方達の文明化を命じた種族からのね。実はけつこう大勢いたんだけど、全員帰化して、そのほとんどが政策形成に深く関わっているわ』

大当たりだ。彼女は生来のサタンじやない。

蝙蝠の翼を持つ猫のような生物、

柔弱で臆病……もとい（笑）、心優しく慎ましい、

生まれながらの現皇帝種族ではない。

高い知性と強い意志を示し、

爛々と輝く金色の瞳で知られる種族。

白銀色の鱗に覆われた、

強靭で柔軟な身体に恵まれた種族。

巨大で優秀な頭脳を発達させられる、

蛸のような形態の種族。

そして何より、銀河系全域の知的種族を悉く
恭順させ、統治した最大最強の軍事種族。
古の時代には神にも準えられた、
『先帝』種族の生き残りだ。

悪魔に化けた神の原型モーテルに、

自身の教訓を語つてもらえるとは、
何と意外で、皮肉なことか！

だが歴史の内幕を知るのに、これほどの好機はない。
『貴方が現皇帝種族の考え方や本音を知りたいのなら、
役立つ情報を提供できるかもしねれない。

なぜなら私達亡命者は、まさにその行動原因を作った、
軍事的專制による失敗の責任者、生き証人なのだから』
ついぶんと素直に、失政を認めるんだな。

でも政治の両輪は正当性と権力、綺麗事だけじゃない。
確かに色々な神話でも、神は悪魔より数多く容赦なく、

『服わぬ者達を滅ぼしているはずだ。

『ただし最初に言つておくけど、

私の後悔は多くの犠牲を出したこと自体にじやない。

犠牲者よりも沢山の人々を救い、幸せにすることが、私達の力だけではできなかつたことについてなの』

やつぱり厳しい連中だな……でも側近種族が墮落して、

内戦を始めたことについてはどう思つてゐるんだろう。

實際は、彼女達が一部の側近種族と通謀して、

腐敗種族を淘汰した、という噂もあるのだが……。

私はそう思いつつも、帝国内戦が人類社会では

ラグナロク、『神々の黄昏』に例えられることが

多いというのを思い出した。

本来は、それを言うならアポカリップス、

『默示録』の方が近いのだろうが、

近いからこそ、生々しすぎて憚られるのだろう。

今では人類も最先進種族に昇格したとはいえ、微妙な話題の振り方には気をつけよう……、

と思つてゐると、まるで私の心を読んだかのように、
彼女の方からその話を切り出してきた。

『でも、『全種族の発展』という建国理念を失つた種族を、
私達がわざと自滅に誘導したというのは、考え過ぎよ。
もつとも、罪なき種族の犠牲をさらには増やしてまで、
助けることはできなかつたのも事実だけどね』
來たか！　彼女もそれが言いたかつたようだ。

『皇帝といえども、全ての臣民の面倒は見られない。

今進んでいる民主化のもとなら、なおさらでしょう？

国民に分け与えられた権限は、自己責任も伴うのよ』

『サタンは歴史の古い種族だけど、

その上に胡坐あぐらをかくことなく、

帝国種族全体の繁栄を願い続けていた。

だから私達も、彼女達を依り代よしろに選んだ。

サタンに協力した貴方達は、賢明だった』

そう言いながら、彼女は私をじつと見つめた。

その言葉を聞いた私は、ぞくりとした。

社会を動かす人々は、

社会全体が争い少なく栄えることで、

利益や安全、誇りを得るはずだ。

私が生まれた日本の歴史でも、天下統一後は

刀狩りと武家諸法度の時代になつた。

勝手に城を直したり、私戦に及んだりしただけで、
改易処分や切腹の憂き目にあつた。

戦乱に乗じて不当な利益を図ろうとしていたら、
人類もまた“不運な巻き添え戦闘被害”によつて、
滅亡した種族の一つになつていたかもしれない。

何より実際、彼女達のような“亡命者”を除けば、
“先帝”種族自身でさえも滅びているのだから……。

そんな想像が、脳裏を過つた。

『豊かな時代に甘えるな……ということですか？』

『そう、技術が進めば社会が変わり、政策も変わり、
その政策が次の技術開発を助けて、文明は発展する。
でもその循環を重ねるほど、技術にできることが増え、
サイクル

政策がなすべきことも増えていく。

政策の変化には、人々自身の向上が必要だし、
向上できた人々も、活用できなきや居ないも同然。^{どうぜん。}

貴方にはそのことを、伝えてほしい』

彼女はなおも私を見据えて、そう言つた。

どうやら私も、重責を任せられたのかもしない。

確かに『サタンの平和^{パックス・サタナ}』が到来したのは、

新帝種族とその友好種族達の、

優しい理想のおかげだけではなさそうだ。

『人々自身の向上と活用?』

『技術が進んで社会活動が省力・複雑化すると、

人々の仕事はそうした技術を使つて、

どんな社会を作るか考える、政策に移つていく。

言われて動くのでなく、どうすべきかを決めるには、
より高い教育や、それを支える健康が必要。

必要な時は大勢が動くが、衆知も集められるよう、政策の広域化と分権化も必要になる』

『昔だったら、資源枯渇や格差拡大が起きた時は、

國民達に領土を広げさせれば良かつた。

開拓や戦争で虚弱者・粗暴者や古い制度も淘汰され、富だけでなく人の問題も解決できた。

面白いことに、技術水準こそ違え私達の星間帝国も、途上種族の歴史と同じ過程^{プロセス}を繰り返していたのよ』

私は反論しようとしたが、できなかつた。

彼女達は、そして人類も、長年^{ながねん}そうしていたのだ。

『でも文明が進むほど、環境の限界や社会の統合、

生活向上、兵器の強化で犠牲や費用^{コスト}、危険^{リスク}が増える。

だからこそ、増えすぎた代償を減らせる技術と社会、それを担える人々と政策が必要になつたわけ。

サタンの最大の功績は、惑星文明の発展を助ける中で、帝国もいざれは必ず同じ状況になる、と気づいたことよ』

新皇帝種族として支持された理由が分かつた。

ずいぶん露骨な表現だつたが、私は政治記者として、彼女の論理を否定することができなかつた。

必要性と許容性は、政策の両輪だ。

永きに渡り、血で血を洗う覇権抗争を

生き延びてきた古き種族もとの達が、

素敵な理想の追求だけを許すはずがない。

それが可能になつたのは、先進軍事技術に加え、

量子人格種族の専制化防止や、

個体群種族の淘汰なき資質向上、

共通個体の設計、共用量子頭脳規格など、

多様な種族の向上と協力をかなえる次世代技術と、

それらを活かす総合政策を考案できたからこそだ。

『幸せを得続けるには、努力が要る……と?』

『まあ簡単に言つてしまえば、そういうことね。

もつとも、サタンが築いたこの素晴らしい時代、ある意味で皆がより狡賢く、幸せになれる時代に、いかに優しく確実に、それを伝えるかは別問題』

彼女はそこで片眉を上げ、意味ありげに微笑んだ。

いざとなつたら、知的種族はどんな酷いこともする。

しかし賢い種族なら、以降の『無駄』は避けるだろう。それができれば、できた者達が星間社会を先導する。

逆に今度は、できない連中が後れをとる。

だが、そんなことをあけすけに言つてしまえば、

せつかく平和を手に入れた人々の心が揺らぎ、

再び疑心暗鬼に陥つて活力を失つたり、

裏をかこうとしたりする者がいるかもしれない。

神と悪魔は知性の両面、天国地獄は紙一重。

皆の心が荒れぬよう、夢と希望を知つてもらう。

でも油断して、さらなる悲劇を招かぬように、

現実的な政策も考えて行い、栄え続けてもらいたい。

途上種族から先進種族に飛躍的発展を遂げ、

星間国家の模範となつた人類に、

そんな願いを実現するための物語を、
上手に伝えてほしいということか。

『まあ私個人としては昔、優しいあの子達に

憎まれ役を演じさせたのも、悪かつたと思つてゐる。
この映像体を使つたのは、

そんな気持ちの表れでもあるのよ』

『なるほど、お気持ちは分かります……。

“クールヘッド・ウォームハート” ということですね』

緊張と興奮を抑えて、笑顔でうなずきながらも、

私の心には様々な思いが駆け巡つていた。

当時全ては救えなかつたが、今後はもつと救いたい。

必要とあれば、今度は自身が悪役となつてでも、

自ら築いた国家の繁栄に貢献したいということか。

自他共に厳しい、名君だつただけのことはあるな。

もつとも、歳月を経た量子人格化種族には、

種族の違いに意味などないので?とも思う。

淘汰の回避が可能になつた時代に合わせて、優しい臣下を表に立てただけのようにも見える。

とはいへ、他の種族ならもつとマシな方法がとれたのか？　と聞かれると疑わしい。

最も若輩の“最先進種族”となつた人類にとつても、淘汰なき社会の到来はありがたいことなのだ。

彼女は、さらに続けた。

『貴方達の世代なら、皆と協力できるから、

もう少し楽ができるだろうと思うけど、

誰かに私達の失敗を繰り返させたり、

サタンの努力を無駄にしたりする気はないわ。

さあ……私の話を聞いてくれる？』

いずれにせよ、陽が沈み、月が昇る黄昏たそがれにあつても、

優しい月を見えない所から輝かせてているのは、

苛烈な光を放つ太陽なのかもしれない。

私は真剣に、彼女の話を聞いていくことにした。